

氏 名	アンタリクサ ANTARIKSA
学位(専攻分野)	博 士 (学 術)
学 位 記 番 号	博 甲 第 113 号
学位授与の日付	平成 8 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研 究 科・専 攻	工芸科学研究科機能科学専攻
学 位 論 文 題 目	STUDY OF THE hondo (kyakuden, hojo) OF RINZAI ZEN SECT BUDDHIST TEMPLES IN KYOTO, IN THE EDO PERIOD : TYPICAL RESTORATION PLANS
審 査 委 員	(主査) 教 授 日 向 進 教 授 河 邊 聡 教 授 宮 島 久 雄 関西大学 教 授 永 井 規 男

論文内容の要旨

本論文は、主として建立当初の平面をまず復原し、その後の改造過程を明らかにすることによって、近世の京都における臨済宗寺院本堂（客殿、方丈）の基本的な平面構成の変遷とその理由を明らかにすることを目的とするものである。禅宗史そのものについてみたとき、禅宗の全盛は中世にあり、近世については十分に論じられていない。禅宗界の動向は、他の宗派の場合と同様に、建築にある程度反映されと考えられ、近世の禅宗寺院における中心的な建築である本堂（客殿、方丈）を対象とする本研究は、未明な課題を抱える近世禅宗建築史研究の空隙を埋めるものといえることができる。

論文は英文により、5章で構成されている。

＜第1章＞ 研究の目的と方法を述べている。

中心となるのは次の3つの章である。近世を3期に分け、考察している。

＜第2章＞ 近世初期に建立された38棟の本堂を対象として分析している。ほとんどの本堂が建立後に仏間後部を縁に張り出すなどの改造を受けていることを指摘している。この時期においては、当初は中世後期的な構成要素を基本的に継承しながら、仏間内の仏壇が広げられるという新たな傾向が萌芽する。それは、画像に代わり、奥行を要する開山の本像が頂像（ちんぞう）として安置されることを契機とするのではないかと推論している。

＜第3章＞ 近世中期に建立された10棟の本堂を対象として分析している。近世初期の基本的構成を継承しているが、当初は板敷であった本堂左右の縁が畳敷の広い縁（入側・いりがわ）に改造される傾向を見せることが顕著になることを明らかにしている。それは玄関あるいは庫裡に近い側の縁が仏事の際に控の間としての機能を負うようになったからではないかと推論している。また、左右の広縁が同時には入側にならないところに、改変される理由を解きあかす糸口が見出されるのではないかと推論している。

＜第4章＞ 近世後期に建立された9棟の本堂を対象として分析している。この時期には、三方の縁が畳縁になるとともに幅が広くなり、「鞘の間」（入側）としての機能をもたせる傾向を見せることを指摘している。それは仏事の回数の増加や、仏事における参拝者の増加に伴い、仏間や縁廻りの改変が継起的に派生したからであろうと推論している。

＜第5章＞ 前3章の結論を整理している。

論文審査の結果の要旨

本研究は、近世の京都において建立された臨済宗禅宗寺院の本堂（方丈、客殿）遺構を網羅し、仏間、広縁、玄関の付き方などの形態を分類することによって、時代性を明らかにしようとする試みである。本研究にとって、本堂の本義的な使用形態を明らかにし得る仏事記録などの分析が必要であるが、現在のところ関連文書そのものが十全に調査されていない。また基本的な構成が単純な禅宗寺院本堂は、それぞれの建築的な差異を明確にすることが難しい対象であるが、申請者は建築遺構を可能な限り詳細に調査することによって、この困難な課題を克服しようとしたもので、学術的価値は高い。

近世禅宗建築史研究のなかで、中世と近世との建築構成上の分節点をどのようにとらえるか、という課題がある。この点について、申請者は、中世から近世への転換点を仏間に木像を置くかどうかを一つの節目として規定し、論を展開している。本堂に反映されている変化の消長は、禅宗界における発展期、後退期、復興期に対応するほぼ3期に大別することができる。申請者は57の遺構を3期にグルーピングし、各時期における変化の実態を明らかにしている。建築形式の復原については、先行研究や修理工事報告書などの成果によるほか、11件については遺構調査にもとづく申請者自身による綿密な復原考察になる。建立当初の状態を復原し、その後の改変の状態と時期を特定することは、本研究にとってもっとも重要な作業である。したがってそれ自身自立した論文とすべき内容を含んでいるが、申請者の主たる関心は近世を通じての禅宗寺院本堂の変化のあり方に置かれており、本論文では復原考察の過程は簡略に述べるにとどめられている。

なお遺構を並列的に扱うだけではなく、各禅寺の歴史的・社会的な背景や塔頭（たちゅう）の性格の変容との関連や、立体的な構成、意匠についても検討することが今後の課題として期待される。

中心をなす3編の論文は連続するものである。第2章は京都工芸繊維大学工芸学部研究紀要『人文』第43号に邦文で掲載されたものをもとに書き改めたものであり（申請者を筆頭とする共著論文）、第3章は『日本建築学会計画系論文報告集』に審査を経て掲載が決定（第484号、1996年6月）している。また第4章は『日本建築学会計画系論文報告集』に投稿審査中である。

以上により、本論文は博士の学位授与申請に十分値するものと認められる。